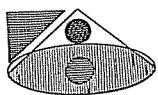


覚者の役割

D・ボーム＋J・クリシュナムルティ／解説・訳 大野純一



思考の問題と人間の解放

一九四〇年代にプリンストンでアインシュタインの同僚だった著名な理論物理学者(ロンドン大学バークベック・カレッジ教授)デヴィッド・ボーム(一九一七-)は、たぶん五十年代の終わり頃、ある図書館でクリシュナムルティ(一九一八―一九八六)の“The First and Last Freedom”(邦訳「自我の終焉」)に出会い、以来クリシュナムルティに関心を持つようになり、その後クリシュナムルティが他界するまで親交を重ねた。その間に両者が行った対話

は、いくつかの単行本として紹介され、そのうち“Truth and Actuality”(邦題「真理の種子」)、“The Wholeness of Life”(邦題「生の全体性」)はすでに邦訳されている。今回紹介する両者の対話は、比較的新しい対話集“The Ending of Time”(平河出版社より近刊予定)に収録されたものである。

科学者ボームと宗教的覚者クリシュナムルティの出会いと二十余年にわたる交流は、そもそも何を物語るのだろうか？ 両者には、その立場、役割のちがいを越えて、人類の一員としての深い危機意識、責任感がある。科

学者としてのボームが関わってきた仕事は、核エネルギーの解放と、その悪用による大量殺戮という問題に深く関わっている。科学技術の進歩は、人間精神の未熟さ、残忍さによって、地球に平和ではなく破壊をもたらすように利用されてきた。そしてまだまだ思っているうちに、人類は他の生物を巻き添えにしつつ急速に破局に向かいつつあることが、日増しに明らかになってきた。ボームが、深い責任感にかられて、人間を破局へと追いこんでいるものの正体を、科学者の冷徹な目で探求しはじめたのは理の当然であり、おそらくその途上でクリシュナムルティに出会ったのである。ボームはそこに、人間の危機の一般的原因としての「思考」、つまり科学的探究などの道具としてのその持ち場を離れて他の領域に侵入した思考の問題を徹底的に指摘し、それを人間の解放という一大テーマに結びつけて洞察している覚者を見出した。ボームはあるインタビューのなかで、次のように述べている。「物理学者は、いままさに袋小路に迷いこんでいる。彼はいくつかの物事を発見するかもしれないが、しかしそれらはあまり深化することはないだろう。彼ら

は、結果を生むことばかりこだわってきたのだ。理論物理学の真の素材は思考の性質である。思考は変化し続ける。絶対的または最終的思考というものはない。それゆえリアリティ(真実在)は思考ではありえず、何かもつと深く、もつと根源的なものでなければならぬ」。

物理学者の実情に関するボームの指摘は、今日依然として有効である。現に、『技術と人間』編集長高橋昇氏は、その「科学は現在も国民の福祉に貢献できるか」(毎日新聞、三月十八日)のなかで、最近のコンピュータやバイオテクノロジー技術ブームに言及して次のように述べている。「……七〇年代に国民の科学技術信仰が崩壊した、と述べたが、人権侵害の危険を内包した現代技術の開拓者たちは、……学者・技術者の特権に安住して権力に迎合し、いまだに『科学は国民の福祉に貢献する』という建前にしがみついている者が多い。国民の常識のほう、知的水準でも、道徳的レベルでも、はるかに彼らの上をいつているのである。現代技術が袋小路に迷いこむのも当然のなりゆきではないだろうか」。世界がこれだけ危機的様相を呈しているというのに、多くの科学者

や研究者は、ひたすら企業や国の利益のために迎合し、また業績を重ねることによって自らの野心を満たし、出世し、より良い地位を得ようとはかっているのである。

問題は科学技術の世界にとどまらない。先頃、自殺した竹下首相の秘書青木伊平氏は、郷里島根の母校の同窓会誌に一文を寄せ、そのなかで次のように書き残しているという。「私は昨秋の政変で、『竹下登総理』の誕生に際し、すさまじい政権抗争の中枢にあつて複雑極まりない人間関係をかい間見て、戦国時代から今日に至るまで、全く進歩が見られない人間関係、戦国の英雄が生命をかけて血みどろの闘争を繰り返したと同じようなことが、この平和な民主国家の舞台裏で展開される様にただただ驚嘆するばかりでした」(毎日新聞、四月二十七日)。さらにまたいわゆる宗教界も、多くは迷信的信仰にもとづき、指導者と信者との間の旧態依然たる権威主義的閉塞的な人間関係に甘んじ、外に対しては政治に寄りそうなど、現代の混乱に一役買っていることが多く、神や真理の探求、平和な世界の樹立といった本来の目的から大きく逸脱している。

このように、現状をざっと見ただけでも、危機の責任が、われわれ人間一人ひとりにあり、これまでの古い生き方を根源的に改め、利己主義の代りに共存、暴力ではなく慈悲心、開発ではなく自然との共生をはたしうるような人間へと「変容」を遂げることが急務であることは明らかである。クリシュナムルティは、個々人の内面の混乱、無秩序と世界の混乱、破壊は直結しており、従って世界の混乱を晴らすには、われわれ一人ひとりが内面の混乱を晴らさねばならないと、たゆむことなく指摘し続け、また彼は、何が人間を正気の、真に健全で調和のとれた「全人」へと変容させるのを妨げているのかを徹底的に、容赦なく見きわめ続けてきた。

ボームにとって、クリシュナムルティを通じて流れている創造的エネルギー、愛、慈悲心、英知、洞察として現われるエネルギーの正体を突きとめることは、核エネルギーの破壊的利用等々の前で立ちすくんでいる人類を破局から免れさせる方向への決定的に重要な一歩なのである。もはや手遅れかもしれないが、それでも人類の一

員としてできるだけのことをしようというこの真摯な姿勢は、感動的ですからあり、それはクリシュナムルティとの対話にも如実に現われている。彼は著名な物理学者としてではなく、むしろ人類が陥っている暗黒、無知による自縄自縛状態から光明への脱出をはかろうとしている一人の探求者、求道者として語っており、彼の学問的知見はその探求において役立ちそうに思われるかぎりにおいて、補足的に引用するにとどめている。

さて、「The Ending of Time」は、「人類は進路をまちがえたのではないか？」というクリシュナムルティの質問で始まる。これに対してボームは、「ええ、たぶん。以前ある本を読んだかと思つたのですが、人間は五、六千年前、他人を略奪し奴隷化できるようになりました。それから、進路をまちがえ、以来もつぱら搾取と略奪に明け暮れるようになったらしいです」と答えている。こうして二人は心理的葛藤の根源、精神の浄化、思考の問題、自己中心的行動様式の打破、存在の（基底）、洞察と脳細胞の変容、死の意味、洞察の伝達、老化の防止、宇宙の秩序、心理的知識の終焉、宇宙的精神、そして断

裂量で暴力的であり続け、生の芳香にけっして浴することはないのである。風にそよぐ草、壮麗な日没、子供たちの歓声、小川のせせらぎ、鳥の鳴き声などの生の歓喜は、何かになろうとして不毛な努力を重ねている者のかたわらを通り過ぎてしまうのである。

クリシュナムルティはそのような努力の不毛を悟り、それを突き抜け、人間という存在の旅を果てまでたどり、そして果て（以下の文中では「基底」という言葉で表現されている）から戻ってきて、暗黒のなかで光明をともし続けた。この紹介の最後に、彼が存在のいかなる深みから語りかけていたかを知ってもらうために、一九七九年、彼がインドのリシ（仙人）峡谷（彼の名を冠した学校がある）で自ら書き残した記録を添えておきたい。

「ある晩、世界のその地方の不思議な静寂のなかで、ふくろのホーホーという鳴き声によっても破られない沈黙とともに彼が目覚ますと、何かまったく異なった新しいものに気づいた。その運動はあらゆるエネルギーの根源に達した。これは、けっして恐怖や切望、絶対的安心へのかたくなな願望に由来する人間精神の投影物で

片化された人生から生の全体性をどう回復させるかへと話しが及んでおり、その深遠な内容は人類の存亡に直接関わっていると言つて過言ではない。クリシュナムルティは、人間の一般的混乱の原因として、彼が現状に満足せず、心理的にたえず何かになろうとしているという事実を挙げている。たえずも、多くはしがり、より安楽に、より安定したが、知的に優越したが、そしてその過程で他者を利用し、より自己中心的領域を広げていき、かくして自分という断片をたえず他の断片と衝突させ続けてきた。国家間、イデオロギー間の衝突、戦争、かつての植民地支配はその最終的な帰結である。たえず何かになろうとする心理的習性は、根深い条件づけの結果であり、それがいかに破壊的に気づくことは容易ではない。しかしこの心理的メカニズムをとめないかぎり、われわれは永久に本然の生を生きることができない。いま、生きるかわりに、いつか生きるため社会や自分自身が立てた目標に向かつてたえずせわしなく、不毛な努力を繰り返して続けていくだけである。悟りを得るため、非暴力的になるために修行し努力する間中ずっと、奇妙にも

ある神、最高原理、ブラフマンと混同したり、あるいはそういうものとみなされるべきではない。それはそのいづれでもない。願望はおそらくそれに到達できないだろう、言葉はそれを測ることはできない、いわんや思考はそのまわりに巻きつくことはできない。いかなる確信をもつてそれがすべてのエネルギーの根源だとあなたは言うのか、と人は尋ねるかもしれない。これに対してはただ、事実そうなのだ、とまったく謙虚さをもつて答えるだけである。……毎晩彼は、この絶対者の感覚とともに目覚めた。それは、静止的で固定した、不動のものではない。人間にとつて無量の全宇宙がそのなかにある。

……これが究極のもの、始まりであり、終りであり、そして絶対なるものである。あるのはただ、信じがたい広大さと、途方もない美だけである」

以下の対話は、この究極的体験の翌年に行われたものであり、その余韻が感じられる。事実、他の箇所でもそれに言及し、その究極の実体、純粋なエネルギーの流れを妨げているものについて討論を展開している。

なお、ボームの『断片と全体』（工作舎）は、彼の思考

に関する洞察を現代の危機との関係において展開したものであり、今回十分に紹介できなかった思考自体の問題を理解するうえで参考になるので、一読をおすすめしたい。

☆ ☆ ☆

クリシュナムルティ 私たちは、脳が何の運動も持たないとはどういうことか話し合いました。人間が何かになるという道をたどってきて、そのすべてを味わい尽くすと、この空、沈黙、エネルギー感が起こるのです。彼はほとんどあらゆるものを放棄し、この地点、^{グラインド}《基底》に至ったのです。では、どのようにこの洞察が彼の日常に働きかけるのでしょうか？ 彼は社会とどんな関係に立つのでしょうか？ 戦争、全世界に関する彼の行為はどうなるのでしょうか？ 実のところ暗黒のなかで生き、苦闘している世界のなかでの彼の行為は？ 私に言わせれば、先日同意したように、それは非運動なのです。

ボーム ええ、以前私たちは、《基底》は区別のない運動だと言いました。

クリシュナムルティ もちろん。それは明白です。もし彼がこの過程に加わらなければ、どんな役を彼は果たすのでしょうか？ それは完全な非行為のそれでしょうか？

ボーム なぜそれを非行為と呼ぶべきなのかがはつきりしませんね。それは別種の行為であり、なりゆく過程の一部ではないと考えたほうがいいのかもありません。クリシュナムルティ それは、なりゆくことではありません。

ボーム が、それはなお行為かもしれません。

クリシュナムルティ 彼はなお、この世界で生きなければならぬのです。

ボーム ある意味で、あなたがするどんなことも行為ですが、しかし彼の行為は錯覚の過程に向けられておらず、それに関わっていないで、この錯覚の過程の下に横たわっているものに向けられるのでしょうか。それはたぶん、たえず《基底》から湧き起こってくるまじがった進路の取り方を見直すことに向けられるのでしょうか。

クリシュナムルティ ええ、ええ。さまざまな宗教が、

クリシュナムルティ 何の区別もない。ええ、まさに。ボーム ある意味で、《基底》は非運動だと言い、他方それは運動だと言うのは矛盾しているように思われませんが。

クリシュナムルティ ええ、《基底》は運動です。平均的な、教育され、洗練した人間は、彼のすべての不快な活動とともに、たえず運動中にあると言えるでしょうか？

ボーム ええ、ある一定の運動をしていると。

クリシュナムルティ 時間における運動ですか。

ボーム ええ。

クリシュナムルティ なることにおける運動。が、私たちが話し合っているのは、その道^{パス}もしこの言葉を用いてよければをたどって、究極地点に至った人間のことで。そこから先、彼はどんな行為に出るのでしょうか？ さしあたり私たちは、非行為、非運動だと言いました。これは何を意味するのでしょうか？

ボーム あなたが言ったように、それはこのなりゆく過程に加わらないことを意味しているわけです。

救われた存在、悟りを得た人、何かそういったものを遂げた人のことを述べてきました。それらは、とくにヒンドゥの宗教書では、彼の歩き方、容姿、話し方、彼のあり方の一部始終が非常にはつきりと述べられています。私の思うに、それはたんに詩的な表現にすぎないのです。

ボーム それは想像だと思いますか？

クリシュナムルティ その大部分は想像だと思います。私はこの点をいろいろ討論したことがあります。すると相手は、いやそれは想像ではない、それを述べている人は、正確にありのままを知っているのだと反論するのです。

ボーム しかし、どうして知るのが明白ではありませんね。

クリシュナムルティ では、その種の人はどんな人なのでしょう？ この世界でどのように彼は暮らすのでしょうか？ もし突っこんで調べてみれば、これは非常に興味深い質問です。非運動の状態があるのです。つまり、すでに私たちが調べたあの非運動です。

ボーム あなたが非運動によって正確に何を意味しているか明白ではありませんが。

クリシュナムルティ 人は詩的になりがちですが、私はそれを避けようとしているのです！ で、これもいささか詩的に聞こえるかもしれませんが、それは、野原に立つ一本の木のようなものです。その木の名前はわかりませんが、しかし他に何の木もなく、その木だけがそこにあるのです。

ボーム が、なぜ「非運動」と言うのですか？

クリシュナムルティ それは不動なのです。

ボーム もちろん、木は立ったままですが。

クリシュナムルティ 木は生き物であり、運動します。

私が言おうとしているのはそのことではありません。

ボーム 木はある意味で運動しているが、しかし野原との関係ではそれは直立したままである——これが、浮かび上がってくる光景です。

クリシュナムルティ 誰かがあなたの許にやって来ます、なぜならあなたは初めから終りまでたどったからです。あなたは最後に、まったく別種の運動、時間を超越

した運動と共にある。で、私はあなたを訪ねて、尋ねます。「それはどんな精神状態ですか？ その道をたどってきて何かを終わらせ、完全に暗黒から抜け出したあなたの精神はどのような状態のですか？」

ボーム もしそれは非運動だと言うなら、それは一定していることが暗示されているわけですか？

クリシュナムルティ 多分。が、「一定」によって何を意味しているのですか？ 連続ということですか？

ボーム いや、ちがいます。

クリシュナムルティ では何でしょう？

質問者(臨時の参加者) ^{スタティグ} 静止的では？

クリシュナムルティ いや、いや。

ボーム しっかり立つこと、一個の全体として立つこと。それが、その文字通りの意味です。

クリシュナムルティ そうですか？

ボーム それが、その木について得られた描像、野原の木が示唆する光景です。

クリシュナムルティ ええ、わかります。それはあまりにもロマンチックで詩的で、ややもすれば欺瞞的な

りかねません。それはすばらしいイメージですが、しかしそれを離れましょう。それはどんな精神なのでしょう？

初めから出発して、なりゆく道をたどり、暗黒の中心を経てそのすべてを一掃した精神の性質は？ そのような精神はまったく異なっているにちがいます。さて、そのような精神は、暗黒のなかにある世界で何をするのでしょう、あるいはしないのでしょうか？

ボーム 明らかに何もしないでしょう。それは、この世界の運動には入らないのですから。

クリシュナムルティ なるほど。

ボーム で、ある意味でそれは一定していて——固定しているのではなく——そして不動であると言えます。

クリシュナムルティ それは静止的なのですか？

ボーム いや、静止的ではないのです。一定していて——また、ある意味でそれは運動なのです。たんに静止的ではなく、また同時に運動でもある恒久性というものがあるのです。

クリシュナムルティ 私たちは、その運動はなりゆく運動ではないと言いました。

ボーム ええ、そうではなく、完全に自由な(基底)の運動だと。

クリシュナムルティ その精神に何が起こったのでしょうか？ それを少々調べてみましょう。それは何の心配も恐怖も持っていない。「慈悲心」や「愛」はそれらを超越しているのではないのでしょうか？

ボーム が、しかしそれらはこの(基底)から出現するのかもしれませんが。

クリシュナムルティ その精神は無であり、物(thing)ではなく、それゆえ空っぽで知識から自由なので、つねに洞察の光に照らして行動していくのでしょうか？

ボーム それは、つねにではないとしても、洞察の性質によって浸透されるのでしょうか？

クリシュナムルティ ええ、それが私の言いたいことです。

ボーム ただし、「つねに」という言葉は時間を持ち込むと思いますが。

クリシュナムルティ では、その言葉を外しましょう。ボーム 「一定不変」という言葉を用いたらどうでし

よう。

クリシユナムルティ 一定不変ですか。ではそれを用いましょう。

ボーム ややましでしょう。十分ではありませんが。クリシユナムルティ ええ、その言葉を使いましょう。

その精神は、その光、その洞察の閃光のなかで一定不変に行動していく。そう言っていると思います。では、それはその人の日常生活において何を意味するでしょう？ どうやって生計の資を得たらいいのでしょうか？

ボーム それは明らかに別問題です。生活を維持する道を見出すというのは。

クリシユナムルティ 生活を維持する。私がそうお尋ねしているのは、文明が進歩するにつれて、乞食が許されなくなるからです。

ボーム 犯罪扱いされる。生活を維持するには、何か他の道を見出さねばなりません。

クリシユナムルティ では、何をしたらいいのでしょうか？ 彼には何の専門職も特技もなく、また物を買うコ

インもないのです。

ボーム しかし、この精神が生活の維持に必要なものを得るのに十分なだけかせぐことはできると思います。が。

クリシユナムルティ どのようにして？

質問者 なぜ彼は生計を立てる技能を身につけていないのですか？

クリシユナムルティ なぜ身につけるべきなのでしょう？ なぜ生計を立てるための技能を身につけねばならないのですか？ あなたは身につけるべきだと言い、その人は「なぜ私が何らかの技能を身につけるべきなのですか？」と言う。私はただそれを討論し、探ってみたいのです。

ボーム 仮にあなたが自分の面倒を見なければならなとしたら、一定の技能が必要になるでしょう、もし一人きりで洞窟にいたら……。

クリシユナムルティ それはごめんです！

ボーム わかります。が、どんな人であっても、どこかで暮らさねばならないわけですから、それに必要な食

か？

クリシユナムルティ 「技能」という言葉を慎重に調べたほうがよいでしょう。

ボーム ええ。技能は悪い意味を持ちえますからね——とても金儲けがうまいといったふうに。

クリシユナムルティ この人は強欲ではなく、お金に無頓着で、将来に備えて貯えたりせず、何の保険にも入りません。が、生きなければなりません。私たちが、車の運転という意味で「技能」という言葉を用いるとき……。

ボーム あるいは大工としての技能。もしこのすべてが消滅したら、生きることが不可能になるでしょう。

クリシユナムルティ 何もかも崩壊してしまうでしょう。

ボーム ええ。

クリシユナムルティ その種の技能を否定しなければならぬと言っているのですか？

ボーム それはありえないでしょう。

クリシユナムルティ ええ。それはあまりにも馬鹿げ

物を得るために何らかの技能を身につけねばなりません。もし誰もが技能などいらないと言ったら、人類は滅亡してしまふでしょう。

クリシユナムルティ そうでしょうか。

ボーム さもないければ、どうなるのですか？

クリシユナムルティ それを突きとめようとしているのです。前に言いましたように、技能は知識を含んでおり、知識から経験が起り、そして徐々に技能を伸ばしていく、その技能が貧しいか、または豊かな生計を立てる機会を与えるわけです。が、この人は、それとはちがう生き方、暮らし方があるかもしれないと言っているのです。一定のパターンに慣れている私たちに向かって、「いや、それはまったくのまちがいかもしれませんよ」と言うのです。

ボーム それは、あなたの言う「技能」の意味次第です。たとえば、仮に彼が車を運転しなければならぬときは、まちがいなく一定の技能を必要とするでしょう。

クリシユナムルティ ええ。

ボーム 彼は、それなしですまそうとしているのです

ています。

ボーム しかし人々はまた、他の人間を使って利益をあげるのが非常に巧みになるわけです！

質問者 私たちはいま、生きることと技能、技能と労働、生きることと生計を立てることを区別してしまつたということでしょうか？

クリシュナムルティ そのとおりです。衣食住を確保することは必要です。

質問者 が、区別は必要でしょうか？ いまの社会構造からして、私たちは生きることと働くことを区別しているのです。

クリシュナムルティ それはすでに見てきました。私たちが話しているのは、こうしたすべてを経て、世界へと戻り、「ここに私がいる」と言っている人のことです。彼は社会とどんな関係にあり、また何をすべきなのでしょう？ 彼は社会とどんな関係を持つのでしょうか？

ボーム 表面的な関係は持たなければなりません、しかし深い、あるいは根本的な意味では持ちません。

関係にあるのでしょうか？ 明らかに無関係です。なぜなら私は暗黒の世界に住んでいます、あなたはちがうからです。私が暗黒から抜け出し——暗黒が終るときにのみ、あなたとの関係がありうるのです。

ボーム ええ。

クリシュナムルティ 暗黒しかないときには、関係はなく、あなたと私は別々であり、そして私は、暗黒と区別に慣れた目であなたを見つめるのです。が、あなたはそうではない。にもかかわらず、あなたは私と何らかの接触を持たなければなりません。いかに表面的で、軽かろうと、私と何らかの関係を持たなければなりません。その関係は、私によつて慈悲心と解釈されたものではない慈悲心のそれでしょうか？ 私の暗黒からは、私は何が慈悲心かを判断できないのです。

ボーム ええ、そうだと思います。

クリシュナムルティ 私にはあなたの愛、あなたの慈悲心というものがわかりません。なぜなら私の言う愛や慈悲心は、私の解釈によるものだったからです。では、私はあなたにどう対したらいいのでしょうか？

クリシュナムルティ ええ、世界との表面的な接触。ボーム 彼は法律に従い、交通信号に従わなければなりません。

クリシュナムルティ まさに。が、私が見出したいのは、彼が何をしたらいいのかです。書くことですか？話すことですか？ それは技能を意味しています。

ボーム 明らかにその種の技能は有害とは思われませんが。

クリシュナムルティ 私はただ聞いているのです。

ボーム 大工のような他の技能と同様に。

クリシュナムルティ ええ。その種の技能。が、彼は何をしたらいいのでしょうか？ 思うに、初めから終りまですべてを経た精神、これまでの討論で話しあつてきたすべてを突き抜けた精神の性質を見出すことができれば、それはまったく異なったものであるのですが、しかしこの世界にいるわけです。彼はそれをどう見るのでしょうか？ あなたは到達し、そして戻ってきたのです——これは大まかな言い方です——が、私はこの世界に住んでいる普通の人間です。では、その私とあなたとはどんな

ボーム いま話しているのは誰と誰のことですか？誰のことを話し合っているのか、私にはよくわからないのですが。

クリシュナムルティ あなた、あるいは「覚者」は一切のことを経て、戻ってきたのです。

ボーム では、なぜ「非覚者」はそうしなかったのでしょうか？

クリシュナムルティ 非覚者はそうしませんでした。彼は覚者に尋ねます。「あなたは誰ですか？ あなたはまるでちがう様子をしている。あなたの人生観はちがっています」。では、非覚者は覚者をどうするのでしょうか？それが問題です。覚者が非覚者をどうするかではなく、言わんとすることがおわかりでしょうか？

ボーム ええ、わかります。非覚者は覚者をどうするか、ですね。

クリシュナムルティ これまでは、私たちの質問は、覚者は非覚者をどうするかでしたが、しかしこれは一面的な質問でした。非覚者は覚者をどうするのでしょうか？

私の思うに、一般に起こるであろうことは、非覚者は覚者を崇拜するか、殺すか、あるいは無視することでしょう。

ボーム ええ。

クリシュナムルティ もし非覚者が覚者を崇拜すれば、そのときは万事がごく簡単です。彼はこの世の美味を享受できます。が、これは私の質問の答えにはなりません。私の質問は、非覚者が覚者をどうするかだけではなく、覚者が非覚者をどうするかです。覚者の要求はこうです。「この暗黒から抜け出さない。この暗黒のなかには何もない、だからそこから出なさい」。どんな言い方をしてもかまいません——抜け出す、晴らす、払い去る、除くなど。で、非覚者は言います。「どうか私を助けて、道を教えてください」。で、再び暗黒へと戻るのです。わかりますか？ では、非覚者は覚者に何をしよう？

ボーム あなたが言ったように、崇めるとか、そういったことをする以外、非覚者は大したことはできないように思われますが。

クリシュナムルティ たぶん覚者は教師であり、社会の外にいます。彼はこの暗黒の領域に属しておらず、そしてそこに囚われている人々に向かって「抜け出さない」と言うのです。そののどが悪いのでしょうか？

ボーム どこも悪くはありません。

クリシュナムルティ では、それが彼の生活手段になるわけですか。

ボーム それが有効であるかぎり、申し分ないでしょう。もちろん、彼のような人がたくさんいたら、いささか制限されるかもしれませんが。

クリシュナムルティ いや、もし彼のような覚者がたくさんいたら何が起るでしょう？

ボーム それは興味ある質問ですね。何か革命的なことが起こると思われますが。

クリシュナムルティ そのとおりです。

ボーム 全部の様相が一変するでしょうね。

クリシュナムルティ ええ。もしそのような人がたくさんいたら、何の分裂もないでしょう。それが要点のすべてではないでしょうか？

クリシュナムルティ 覚者を殺すか、無視するわけですか。

ボーム が、もし覚者のなかに慈悲心が働けば……。

クリシュナムルティ ええ、覚者はそうです。それを慈悲心と呼ぶことすらしないでしよう。

ボーム ええ。しかし私たちはそう呼ぶわけですか。では、覚者は暗黒を貫く道を見つけないとしよう。

クリシュナムルティ お待ちください。では、覚者の仕事は暗黒に働きかけることでしょうか？

ボーム 暗黒の見通し方を発見することです。

クリシュナムルティ そのようにして彼は生計を立てるわけですね。

ボーム おそらく。

クリシュナムルティ いや、まじめな話です。

ボーム それは、人々が彼の行為に対して代価を払う気になるかどうかにかかっています。

クリシュナムルティ いや、冗談ではなく、まじめな話として。

ボーム ありうると思いますね。

ボーム そのような人がたとえ十人でも十五人でも結合していたら、私たちの歴史でかつて見られなかった力を及ぼすでしょう。

クリシュナムルティ 実にすばらしい！ そのとおりです。

ボーム なぜなら、いまだかつて十人が結合したことはなかったと私は思うからです。

クリシュナムルティ それをもたらしことが覚者の仕事です。彼は、それが唯一のことだと言います。これら十人の覚者の一団は、これまでとはまったく別種の革命を起こすことでしょう。社会がそれを我慢するでしょうか？

ボーム 彼らは、あの至高の英知を持つでしょうから、それを切り抜ける道を見つけてでしょう。

クリシュナムルティ もちろん。

ボーム 社会はそれを我慢するでしょう。なぜなら、覚者たちは社会を怒らせないよう十分英知を働かせるでしょうし、社会も手遅れになってから応えるようなことはしないでしょうから。

クリシユナムルティ そのとおりです。あなたは、実際に起こりつつあることを話しておられる。ではあなたは、多数の覚者の役割は、闇を晴らすであろうその英知へと人類を覚醒させることだとおっしゃるのですか？で、それが彼らの生計の資になると？

ボーム ええ。

クリシユナムルティ 一方には暗黒のなかで生活力を養い、他人を搾取する人々があり、他方これら、おおよそ搾取などしない覚者がいる。確かに。これは至って単純に思われますが、しかしそれほどすべてが単純だとは思われません。

ボーム なるほど。

クリシユナムルティ それが覚者の唯一の役割でしょうか？

ボーム 実際は、それだけでも困難な役割でしょう。

クリシユナムルティ が、私は、たんなる役割より何かもつとはるかに深いものを見出したいのです。

ボーム ええ。役割だけでは不十分です。

クリシユナムルティ そのとおり。役割とは別に、彼

は何をしたらいいのでしょうか？ 覚者は非覚者に「お聞きなさい」と言います。で、非覚者は時間をかけ、そして徐々に、たぶん一時的に目覚め、それからまた立ち去っていくのです。では、それが覚者が人生でしようとしていることのすべてでしょうか？

ボーム それは、何かより深いものの結果でありうるにすぎません。

クリシユナムルティ より深いものとは、あの〈基底〉ですね。

ボーム ええ。〈基底〉です。

クリシユナムルティ が、彼がこの世界ですべきことは、人々が暗黒を抜け出すよう教えることだけででしょうか？

ボーム そうですね、もしこれが起こらなければ、社会全体が早晚崩壊してしまうだろうという意味で、それは現時点で最重要課題のように思われますが。果して覚者が、ある意味でそれ以上深く創造的である必要があるかどうか疑問ですね。

クリシユナムルティ それ以上のものとは何でしょう？

ボーム はっきりわかりません。

クリシユナムルティ 仮にあなたが覚者だとして、広大な活動領域——たんに教えることだけでなく、時間の外にあるこのとてもない運動——を持っているとします。すなわち、あなたはこの豊かなエネルギーを持っており、そのすべてを私が暗黒から抜け出すよう教えるために生んできたのです。

ボーム それは、その一部でありうるにすぎません。クリシユナムルティ では、残りは何をするのですか？

ボーム ええ、私が創造的行為、これ以上のものについて触れることによって示唆しようとしたのはそれなのです。

クリシユナムルティ ええ、これ以上のもの。覚者のあなたは書き、説教し、癒し、あれ、またはこれをするかもしれませんが、しかしこれらすべての活動はいささか些細です。あなたは何か他のものを備えています。私

はあなた、覚者、を自分の狭量へと引き下げたのでしょうか？ あなたはそうに引き下げられはしません。私の狭量な心は言います。「あなたは何かしなければいけない。説教し、書き、癒し、私を抜け出させることをしてほしい」。あなたはそのようなごく小さな事柄に合わせはしても、しかし何かずつとそれ以上のもの、測り知れないものを持っているのです。言わんとすることがおわかりでしょうか？

ボーム ええ。では何が起こるのですか？

クリシユナムルティ その測り知れないものは、非覚者にどう働きかけるのでしょうか？

ボーム 何かより直接的な行為があると言っているのですか？

クリシユナムルティ より直接の行為があるか、あるいは覚者は、人間の意識に影響するために何かまったく異なったことをするのです。

ボーム 何ができるのですか？

クリシユナムルティ なぜなら覚者は説教したり、講

話をしたりするだけでは「満足」しないからです。覚者の本質をなすあの無限なるものは、結果をもたらし、何かをしなければなりません。

ボーム あなたは「ねばならない」と、それをする必要だと感じているという意味で言っているのですか、それともそれは必然だという意味で言っているのですか？

クリシュナムルティ 必然的ということですよ。

ボーム 必然的にそうしなければならないわけですが、どのようにそれは人類に影響するでしょう？ あなたがそう言うのと、広がりを与える種の超感覚的影響があることを人々に示唆することになるでしょう。

クリシュナムルティ それが私のつかもうとしていることであり……。

ボーム ええ。

クリシュナムルティ 私の伝えようとしていることなのです。

ボーム 言葉や活動や身振りによってだけではないと。

困難であることを見出すでしょう。

クリシュナムルティ 私は多くの人に關心はありません。私は覚者であるあなたと、非覚者の私を理解したいのです。その〈基底〉、その無限は、そのようなちっぽけな事柄に限定されません。ありえないことです。

ボーム その〈基底〉は、物理的に全宇宙を含んでいるわけですよ。

クリシュナムルティ ええ、全宇宙を。で、そのすべてを……。

ボーム これらの小さな活動に還元することは……。クリシュナムルティ この上なく馬鹿げています。

ボーム そのことは、宇宙あるいは〈基底〉における人類の意義とは何かという問いを引き起こすと思うのです。

クリシュナムルティ ええ、そのとおり。

ボーム 私たちがしてきたこれら小事の最善のものですら、その規模ではほとんど無意味だからです。ちがいますか？

クリシュナムルティ その種の活動は放っておきましよう。それは単純なことです。事はそれだけではありません。なぜならその無限なるものは……。

ボーム 必然的に行動するのですか？ より直接的な行動があるかと？

クリシュナムルティ いやいや。いいですか、その無限なるものは、必然的に他の活動を起こすのです。

ボーム 他のレベルの他の活動をですか？

クリシュナムルティ ええ、他の活動。これはヒンドゥ教の教えではさまざまな段階の意識として解釈されました。

ボーム 異なったレベルまたは程度の行為があると。クリシュナムルティ それもまたすべて、ごくごく小さな事柄です。どう思いますか？

ボーム そうですね、意識は〈基底〉から出現するので、その働きは〈基底〉から全人類に影響を及ぼしているわけです。

クリシュナムルティ そうです。

ボーム 多くの人は、それを理解することがきわめて

クリシュナムルティ ええ、これはほんの序章です。思うに覚者は何かをする——いや、するのではなく、まさに彼の実存によって……。

ボーム 何かを可能にしつつあるわけですか？
クリシュナムルティ ええ。アインシュタインのことを本で読んだのですが、彼は人間がそれまで発見しなかったことを可能にしたということですね。

ボーム それはかなり容易に見ることが出来ます。なぜならそれは、社会の通常の経路を通じて働くからです。クリシュナムルティ ええ、わかります。小事は別にして、覚者は何をもたらしつつあるのでしょうか？ それを言葉で表わすと誤解されかねませんが、覚者はあの無限の英知、あのエネルギー、あの何かを持ち、彼は人がおそらく想像しうるよりもっとはるかに深いレベルで働くにちがいがなく、そしてそれは暗黒のなかで生きている人々の意識に影響を及ぼすにちがいないのです。

ボーム おそらくそうでしょう。問題はその影響が何らかのかたちで示されるのかということです。外に表わ

れるかどうかです。

クリシユナムルティ 見たところ否でしょう。テレビやラジオのニュースを聞いて世界中の出来事を知らされていても、見たところそれは影響を与えていません。

ボーム それが困難な点であり、大きな関心の的なのです。

クリシユナムルティ が、影響を及ぼすにちがいありませんし、及ぼさねばならないのです。

ボーム なぜ「ねばならない」とおっしゃるのですか？
クリシユナムルティ なぜなら、光は闇に影響を与えるにちがいなからず。

ボーム たぶん非覚者は、暗黒に住んでいるので、そのような影響があるかどうか確かめられないと言うかもしれません。たぶんあるだろうが、しかしそれらをはつきり確かめたいと言うかもしれません。なお何も見ず、暗黒のなかにいれば、どうしたらいいんだと尋ねるでしょう。

クリシユナムルティ わかります。では、覚者の唯一の活動はただ書いて教えることなのでしょう。

クリシユナムルティ いや、覚者は、自分が非常に論理的だと言います。

ボーム ええ。しかしこの段階では論理は私たちをそれほど前進させてくれないでしょう。

クリシユナムルティ それはとても論理的なのです。私たちはそれを経てきたのです。覚者の精神は不合理な行為は犯さないので。

ボーム あなたがそう言えるのは、そのことの合理性を見てきたからです。非覚者もさらに先に進めるとい見込は持つかもしれませんが……。

クリシユナムルティ ええ、それが私の言わんとしていることです。

ボーム しかしもちろん、証拠はないのです。

クリシユナムルティ ええ。

ボーム これ以上探究を進められるのでしょうか？

クリシユナムルティ それが私のしようとしていることなのです。

質問者 覚者の他の活動についてはどうなのでしょう。

か？

ボーム いや。その活動はもっと偉大であるにちがいないのですが、しかし形になって表われません。それが見えさえすればいいのですが！

クリシユナムルティ どうそれが表われるのでしょうか？ その証拠を見たがっている非覚者は、どうやってそれを見たらいいのでしょうか？

ボーム 非覚者はこんなふうに言うかもしれません。「多くの人々が同じような言明をしてきましたが、その何人かは明らかにまちがっていました。しかし、今度のは本当だろうと思いたいですね」。いままでのところは、私たちが言ってきたことは意味をなすでしょうし、ある程度はついてきてくれると思います。

クリシユナムルティ ええ、そうでしょう。

ボーム そしていま、さらにそれ以上の何かに触れようとしています。他の人々もそのようなことを言いましたが、どうも彼らはまちがっていたように思われますし、少なくとも自分をごまかしていたのではないかと思います。

う？ 彼は教える役目を担っていますが、それ以外の活動も担っているとききましたね。

クリシユナムルティ 持たねばなりません。必然的に。

質問者 が、何をですか？

クリシユナムルティ わかりません。いまそれを見出そうとしているのです。

ボーム あなたは、なぜか覚者は人類の意識全体のために、彼なしにはできなかったであろう（基底）の働きを可能にするのだと言いたいのではありませんか？

クリシユナムルティ ええ。

質問者 非覚者との彼の接触は、たんに言葉によるだけではないということ。非覚者は聞きますが、しかしそこには何か他の性質がある……。

クリシユナムルティ ええ。が、覚者は、そういつたすべてはごくちつぽけな事柄だと言います。言うまでもないことだ、と。彼は、何かずっと大きなものがあるのだと言っています。

質問者 覚者の影響は、たぶん言葉で表わされるよりもはるかに大きいのです。

クリシユナムルティ 必然的に働かざるをえないそのより大きなものを見出そうとしているのです。

質問者 それは、何か覚者の日常生活に現われるものなのですか？

クリシユナムルティ ええ。彼の日常生活においては、覚者は表向きはやや小さなことをしていくでしょう—教え、著作、あるいは簿記かもしれません。が、それがすべてでしょうか？ それではいかにも馬鹿げています。ボーム 覚者は、日常生活では他の誰とも見かけはさして変わらないと言っているのですか？

クリシユナムルティ ええ、別に変わりません。

ボーム が、姿を現わさない、何か他のものが進行していくわけですね？

クリシユナムルティ そのとおり。覚者が語るとき、ちがいはあるかもしれませんが、言い方が異なるかもしれませんが、しかし……。

ボーム それは根本的ではないと。なぜなら、他人とちがう言い方を心得た人ならいくらでもいるからです。

クリシユナムルティ 知っています。が、そういった

すべてを一番初めから歩き抜いた人がいて、エネルギーの全部を結集していれば、それをこういったちっぽけな事柄に縮めることは、いかにも馬鹿げたことに思われます。

ボーム お尋ねしたいのですが、なぜ〈基底〉は、人類に働きかけるためにこの人を必要とするのでしょうか？なぜ〈基底〉は、ものごとを片づけるのに、いわば直接人類に働きかけられないのですか？

クリシユナムルティ ああ、ちょっとお待ちください。あなたは、なぜ〈基底〉は行為を要求するかと尋ねているのですか？

ボーム なぜ〈基底〉は、人類に影響を及ぼすためにある特定の人を必要とするのですか？

クリシユナムルティ おお、それは簡単に説明できません。それは、星のように生の一部なのです。

質問者 無限なるものは、人類に直接働きかけられないのですか？ それが人類の意識に入るには、ある人間をあらかじめ満たさねばならないのでしょうか？

クリシユナムルティ 私たちは、何か他のことを話しているのです。私が見出したいのは、覚者が「私は書いて話したりすることだけに限定されたくない。それはあまりにもちっぽけだ」と言うかどうかです。そして他の質問は、なぜ〈基底〉は彼を必要とするかです。

ボーム しかし彼がいれば、〈基底〉は彼を用いるのでしょうか？

クリシユナムルティ そのとおりです。

ボーム では、ものごとを解決するのに〈基底〉は何をすることができるのでしょうか？

クリシユナムルティ それが私の見出したことであり、言い方はちがいますが、〈基底〉は人間を必要としていないが、しかし〈基底〉に触れた人がいると言っているのはそのためなのです。

ボーム ええ。

クリシユナムルティ ですから、〈基底〉がその人を使っている、あるいは雇っているのです。彼はその運動の一部なのです。それがすべてでしょうか？ 言わんとしていることがおわかりですか？ 私はまちがった質問

をしているのでしょうか？ そもそも、その運動の一部であること以外に、彼は何をすべきなのでしょう？

ボーム たぶん、何もしないのでしょうか？

クリシユナムルティ まさに何もしないことが、彼の行いなのかもしれません。

ボーム 何もしないことが、〈基底〉の働きを可能にするのかもしれませんが。何ら特定の目的を持ったことをしないことによって。

クリシユナムルティ そのとおり。人間の用語に翻訳できるような特定のものは何も含まれていないのです。

ボーム ええ、しかしなお彼は、無行為において最も活発に働いているわけです。

質問者 その人の場合は、時間を超越した行為があるということですか？

クリシユナムルティ まさにそうなのです。

質問者 では、私たちは彼から結果を求めることはできません。

クリシユナムルティ 彼は結果など求めていません。

質問者 しかし非覚者は結果を求めているのです。

クリシュナムルティ いや。たぶん覚者はこう言うでしょう。「私は話したりすることに関心はあるが、しかしそれはとても小さなことです。それよりも、人類全体に影響を及ぼすにちがいない、とても広大な領域があるのです」。

ボーム 化学では触媒という、それ自体であることによって一定の作用を可能にするものがあります。類比としてあまり良くはないかもしれませんが、しかし一考に値すると思います。

クリシュナムルティ ええ。では、それが起こっていることですか？ それすらも小さなことです。

ボーム ええ。

質問者 しかしここで非覚者は、「でもそういうことは起こっていないではありませんか、なぜなら、世界は依然として混乱だからです。この世界には、覚者の活動のための真理の余地などあるのでしょうか？」と言うでしょう。

クリシュナムルティ 覚者は言うでしょう。「あいに

くですが、それは少しも問題ではありません。私は何かを証明することに関心はありません。それは、表示され、証明されるべき数学的または技術的問題ではないのです」。そして彼は、自分は人間の初めからずっと終わりまで歩んできた、そしていま時間を超越した運動のなかにあり、宇宙、コスモスなどの一切である（基底）に触れたのだと言います。そして〈基底〉は人間を必要としないが、しかし彼がそれに会ったのだと。で、彼は依然としてこの世界の人間として、「私は書いたり、他のことをしたりしますが、しかし〈基底〉の存在を証明したりするためではありません」と言います。彼はただ、慈悲心からそうするのです。しかし、必然的に世の中で役を果たす、もっとはるかに大きな運動があるのです。

質問者 そのより大きな運動は、覚者を通じて役を果たすのですか？

クリシュナムルティ 明らかに。覚者は言います。「おそらく言葉にはできない何か他のものが働いているのです」。で、彼は尋ねます。「何をしたらいいですか？」。

たぶん非覚者は理解してくれそうもない。彼はただちにそれを、ある種の錯覚のようなものに翻訳してしまうだろうから。が、覚者は「何か他のものがある、さもない

れば全部が実に子供じみている」と言います。

ボーム 私の考えでは、いま一般に広まりつつある宇宙観は、宇宙には意味はない、それは古い道をたどっている、物事はただ生起していくだけで、そのどれも無意味だというものです。

クリシュナムルティ ここにいる人にとってはそれはどれも無意味ですが、しかしそこにいて、そこから相対的に語っている人は、それは思考によって考え出されたものではなく、意味に満ちていると言うでしょう。

よろしい。広漠たる空間等々を離れましょう。覚者は言います。「この洞察を持った人が多分十人いれば、それは社会に感化を及ぼすでしょう。が、それは共産主義や社会主義、あれこれの政治的再編成ではなく、英知と慈悲心にもとづいた、これまでとはまったく異なった社会をもたらしでしょう」。

ボーム ええ、もし十人いたら、彼らは、それをさら

に広げていく道を見つけ出すかもしれませんね。

クリシュナムルティ そこを私は突き止めたたいのです。

ボーム と言うと？

クリシュナムルティ 覚者は宇宙を持ってくるのです、しかし非覚者はそれを何かちっけなものに翻訳してしまうのです。

ボーム もし全人類がこれを見れば、何か異なった事態が起こってくるとおっしゃりたいのですか？

クリシュナムルティ ええ、そうです。むろん！

ボーム 何か新しいもの……。

クリシュナムルティ 地上に天国が現出するでしょう。

ボーム それは何か新種の有機体の出現のような……。

クリシュナムルティ もちろんです。しかし、私はそこで満足しません。

ボーム と言うことは？

クリシュナムルティ この無限なるものをわずか数語

に還元したままでは満足しません。それではいかにも幼稚で、信用できません。一般に人間、非覚者は、「私に見せてくれ」、「私に証明してくれ」、「それはどんな利益があるのだ?」、「それは私の将来を左右するか?」といった考えにこだわっています。で、彼は覚者を、その卑小さに慣れた目で見るのです! そこで彼はこの無限なるものを自分の卑小さへと縮めて、それを寺院に収めてしまい、それゆえすっかり本来の状態を喪失してしまつたのです。が、覚者は言います。「私はそんなことを見る気はない。何かとてつもなく広大なものがある。どうかそれを見てほしい」。しかし非覚者はつねに、実証、証拠、報いを求めることによって、それを翻訳してしまうのです。つねにそちらに関心があるのです。覚者は光をもたらしします。それが彼にできる全部です。それで十分ではないでしょうか?

ボーム 他の人々を無限なるものへと開かせるようにする光をもたらすことですか?

クリシュナムルティ つまり、ほんの一部しか見ないので、しかしまさにその小さな部分が無限へと延び

ているということではないでしょうか?

ボーム 何の小部分ですか?

クリシュナムルティ いや。私たちは無限を、ごく小さなものとして見るのですが、そのようにして見られた無限が全宇宙なのです。それは非覚者、社会に何かとてつもない影響を及ぼすにちがいないと思わざるをえません。

ボーム 確かにそれを知覚することは影響を及ぼすにちがいないのですが、しかし現時点での社会の意識にはそれはないように思われます。

クリシュナムルティ わかります。

ボーム が、あなたはなお、そこに影響があるとおっしゃるのですか?

クリシュナムルティ ええ。

質問者 たとえ小さな部分の知覚でも無限だということですか?

クリシュナムルティ もちろんです。

質問者 それは、それ自体が変化の要因なのですか?

ボーム そのようなものが、人類を今たどっている危険な進路からそらすことができると思いますか?

クリシュナムルティ ええ。それが私の考えです。が、人類の破滅への進路を転換するには、誰か聞く人が出なければなりません——十人が聞かねばならないのです!

ボーム ええ。

クリシュナムルティ あの無限なるものの呼び声を聞かなければなりません。

ボーム では、無限なるものが人間の成り行きを転換するのであって、個人にはできないのですね。

クリシュナムルティ ええ。個人にはできません、明らかに。が、この道をたどりきつたとされる存在である覚者が「聞きなさい」と言っても、非覚者は聞かないのです。

ボーム では、人々を聞かせるようにさせる方法を発見することができるでしょうか?

クリシュナムルティ いや、それではあと戻りです!

ボーム と言いますと?

クリシュナムルティ じたばたするな、ということ

す。何もすることはしないのです。

ボーム 「何もすることはしない」とはどういう意味ですか?

クリシュナムルティ 非覚者としての私は、犠牲、修行、放棄など何をしようと、なおあの暗黒の円のなかに生きていることがわかります。そこで覚者は「じたばたしないようにしなさい。何もすることはしないのだ」と言い聞かせます。が、それは、何が起るかを待ち、そして見ることで以外のあらゆることをしようとす非覚者によって勝手に解釈され、あれこれのことを追求しなければ望みはないと思いがいさされてしまうのです。

(一九八〇年四月十九日、カリフォルニア、オーハイ)

(デヴィッド・ボーム II ロンドン大学教授
(ジッドウ・クリシュナムルティ II 思想家)
(おおの じゅんいち・翻訳家)